

有機稲作において、抑草をどのように効率的に行うかは大きなポイントの一つである。田植えた後に水管理のみで、一切人や機械が田んぼに入らず、抑草することができれば、有機稲作が各地で広がる可能性が大いにある。

取組主体の概要

- 所在地：栃木県佐野市
- 取組主体：関塚農場
- 取組農家数：1戸

品目	面積 (a)	化学肥料・ 化学農薬の 低減割合	認証関係			
			有機 JAS	特別 栽培	GAP	1777 -マ-
水稻	180	不使用	○			

取組の経緯等

栃木県内の有機農家で田植え後一切除草しない稲作を実践されている方がいると聞き、自分も実践してみたくなった。
除草しない稲作が実践できれば、かなり効率的な有機稲作を実践できるので、栽培面積を増やすことができると考えた。

取組内容と成果

生産に関する取組

代かき3回と田植え後の深水管理で、実際に田植えた後に草が生えてこないか試し、おおむね成功したため、栽培面積(2015年：60a→2021年：180a)を増やすことができた。

流通・加工に関する取組

お米の販売に加え、加工にも取り組みたいと考え、玄米粉の生産も2021年から始めた。玄米粉の製粉は製粉所に加工を委託した。この際、お菓子にも使えるような粉であれば販売しやすいだろうと考え、お菓子でも使えるように製粉できる製粉所を探し委託した。

消費に関する取組

直接、消費者の方にお米を販売しているため、顧客の獲得が大きな課題の一つだが、SNSやウェブサイトなどのインターネット上のつながりを強化して、顧客を掴んでいる。

その他の取組

獣害の激しい地域なので、イノシシやシカの害がひどいが、安価で設置しやすい柵を考えて、実践した。ワイヤーメッシュ、異形鉄筋、VP管、ネットを用いて、獣害に対応している。

今後の展望

田植え後一切除草しない有機稲作は概ね実現できたが、単収が不安定(4～6俵/10a)な面もあるので、今後は除草機を活用して除草の効率をさらに高め、収量の安定化を図るとともに、雑草以外の減収要因を分析し単収を上げられるようにしたい。

成功のポイント

課題となった点

【抑草技術】

1回目の代かきから雑草が生え始めたときに2回目の代かきを行うが、雑草が生えるタイミングが分からなかった。

【獣害対策】

2020年にシカの害が増えて、10aくらいのお米を食べられてしまった。稲作をやめてしまおうかと思うくらいの被害だった。



雑草が生えてきた様子

解決に至るプロセス

【抑草技術】

代かきを何度も実践することで、雑草の生える時期がわかるようになり、2回目の代かきのタイミングが分かるようになってきた。1回目の代かきからだいたい2週間位、また、2回目の代かきから10日目くらいで草が生えてくることがわかった。

【獣害対策】

シカ害を止めるために防護柵を見直した。地上1mはワイヤーメッシュで、ワイヤーメッシュの上に電気柵の電線4本を設置したが、獣に突破され続けられたため、電気柵をやめることにした。

工夫した点

【抑草技術】

3回代かきを行うことにした。1、2回目の代かきで多くの雑草の発生を促すため、1回目の代かきの時期をなるべく早く（4月下旬）して、3回目の代かきで抑草を行った。

【獣害対策】

電気柵をやめて、ワイヤーメッシュ（1m）の上に鉄筋とVP管、ネットで自作した柵を1m張り、高さ2mにした結果、2021年はほぼ防ぐことができた。ただし、突破しようとして支柱が折れてしまうことがあるので、改良も検討するべきである。



アドバイス・メッセージ等

田植え後一切除草しない方法は、水温が冷たい地域では、代かきの間になかなか雑草が生えてこないのが難しいかもしれないが、できる地域もあると思うので、挑戦してほしい。

本取組の問い合わせ先

・ 関塚農場 Tel : 0283-87-0536